狂日記

一月一日

静かなる夕べ、ひとり野を行く。

小さきるり色の花、るりはこべとは其名あまりに説明に過ぎたり、何とかよき名名づけやらんとは、今奈良にある友のいひき。亡き野の人もいひき。この花春されば先づ咲く、人の手さふる直ちに散りゆく。触れ給ふな、触れ給ふな、世の人の手には穢されじ、とやいふ。まことあはれなれど、何しかもさは心短かき、触るるものみな汝が敵ならむや。

すみれ、昔ながらのやさしき色香、されども近く汝をもてあそぶある一派のものの浮薄なるはいかに。否々それによりて汝が身は害はれざるべし。さるものにもてあそばるるによりていよよあはれなり。ペンペン草に似て花は空色の細かきが一本にいくつも咲きたる、こはヰルデフヘルギツスマインニヒトといふ。今野をゆくわび人そと立ちとまりて、此世に何の楽しきふしかある。四面我を呪ふと思ふに汝何の執する処ありてさは願ふと聞く。花はあるかなきかの風に揺れて答ふるけはひもなし。

クレー、こは三葉なるがこの性なるをたまさかに四葉なるがあり。そを見出たらん人に幸あるべしといふ。みづからは其かたわを恥づるならんを。

つりがね草、日の光薄れて野もたそがるるに、夕風この花にさやさやと音づるる、小草が為の入相の鐘ぞ。今大いなる夜の平等なる手に抱かれて、昼のまの競ひの色忘れて、花といふ花、名あるも名なきもひとしく美しき夢路に入る。

一月一日

空うららかに鳥唱ふ日なり。階上の室、窓を背にしてピアノに対ふ。黒く光れる正面の板に、窓の外のさまおぼろげに見ゆ。遅々としたる雲の歩み、風になびく柳の糸、いづこよりいづこにか去る、鳥の群さと傾に過ぐ。見るともなく見つつふとシャロットの女を思ふ。マーリンが鋳たる鏡にむかひて不断の機織るシャロットの女を思ふ。かれは魔術を会得したるマーリンの鏡、これはいづこの誰が心なく塗りたる板、されど猶この板のうつりかはりをさながら曲に編むでたゆる期なく唱はばいかに、奏でなば

いかに。

—月—日

今自分はあるアテリエに居る。花やかな色、麟々しい色、軽い色、重い色の中に居る。窓から夕暮の色がは入つて来て、まづ柔い色から吸ひ込んでしまふ。強い色は中々負けずに美しい調子を浮き出させて威張つて居る。長く長く立ちつくしてゐると、到頭何ものも皆灰色の気に負けつくしてしまつたが、自分の心にはまださまざまの色彩が消えずにゐる。昨年展覧会で見た絵もここで見ると又まるで違つて見える、やつぱり自分はおちついて一つ絵をジツと見るに限ると思ふ。

「あの顔はあんまり赤すぎると思ひますが？」。「イイエすぎるとも思ひません。よくわかりませんけれど」。「ある人に見せられK先生はあんな赤い顔じやないといふのです」。「でもあの絵は全体が赤いのでせう」。「エエ、それでもK先生はやはりこちらの絵の様にクリスト式に描く方が似合ふといふのです、K先生といへばすぐそんな気がするのでせう」。「K先生を無理にクリスト式ときめてしまふのは平凡でせう、K先生がただ一色にきまつてゐるものですか」。「ハハやはり群盲の大象評ですかね、兎に角あれはも少し直すつもりです」

階下の室で若主婦のピアノをきく、此夜の心持に似合つた即興楽である。ピアノの上のチュイリップが顫へてゐる。楽を聞きながらロダンやウーデやボツチエリや猶色々のを見せて貰ふ。棚の上に小さいおちよくが沢山のせてある。これにはナナや死の勝利や海からの女などが焼きつけてある。ナナであつたと思ふ、まるい目をしておちよくの中からじいつとこちらを見て居たのは。

色々話をきいて、自分がふだん勝手におなかの中できめてゐる事と比較して見る、大分よい学問をしたと思ふ。

—月—日

おばけの本をよむ。それは此間先生が選んで下さつた本の中である。その時かういふ本は夜中に読むに限ると聞いた。それで今午前二時、一心に読んで居るのである。ああ気味がわるい、こはい、よさうかと思ふがどうしてもよせない、そこいら中がゾク

ゾクする。目を本以外に向ければ、きつと異形のものが見えようと思ふ。耳を他に借せばきつと異様の叫びが聞えようと思ふ。こはい、こはい、それでも文字は自分をひきつけてさきへさきへと導く。

【入力者注】底本と行を合せるために、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本：阪本幸男編著「橘糸重歌文集」短歌新聞社
　平成二十一(2009)年十月十五日発行
初出：「心の花」第十五巻第九号
　明治四十四(1911)年九月一日発行
筆名：橘糸重子
入力：小林　徹
公開：令和四(2022)年十月十七日

橘糸重【散文作品集】に戻る。